

飛ぶのは怖くない

——サッポーの愛と自殺とジェンダー——

川津雅江

エリカ・ジョング (Erica Jong) のベストセラー『飛ぶのが怖い』(*Fear of Flying*, 1973) は女性作家の愛と性の探索を濃厚に描き、第二波フェミニズムの発展に寄与した小説である。そのタイトルは何か象徴的な意味を持っているかもしれないが、文字通りには、ヒロインのイザドーラ (Isadora) が飛行機で飛ぶことが怖いことからきている。私は古代ギリシャのレスボス島出身の叙情詩人サッポー (Sappho) のイギリスにおける受容を考えるたびに、いつもジョングの小説のタイトルを思い起こした。なぜなら、サッポーの伝説的な死は「飛ぶこと」と切り離せないからである。もっともサッポーの「飛ぶこと」は fly ではなく、leap なので、イザドーラの話とほとんど関係がない。しかし、ジョングもまたサッポーの「飛ぶこと」に関心があったらしく、30年後に『サッポーの投身』(*Sappho's Leap*, 2003) という彼女の生涯をフィクション化した小説を出版した。

「サッポーの投身」(*Sappho's Leap*) についてのフィクションは、古代ギリシャ・ローマ時代から現代までである。本論では、イギリスの長い18世紀における「サッポーの投身」のさまざまな表象をとりあげ、愛と自殺とジェンダーの問題を考えたい。

I

「サッポーの投身」とは、サッポーが愛のために跳躍・身投げ (leap) したことを意味する。紀元前6世紀のサッポーがいつ、どこで、どのように亡くなっ

たのかは明確ではない。だが、彼女がパオン（Phaon）という名前の若くてハンサムな渡し守に失恋したあと、ギリシャ西岸沖にある島レフカス（Leucas）¹の岩上から身を投げ、亡くなったという話は、紀元前4世紀頃のアテナイの喜劇作家メナンドロス（Menander）の喜劇で描かれ、1世紀のローマの詩人オウィディウス（Ovid）の『女主人公たち』（*Heroides*）の第15番目「パオンに宛てたサッポーの手紙」（“Sappho Phaoni”）を経て伝説化した。

オウィディウスの詩はサッポーが海へ身を投げる直前にパオンに宛てて書いた手紙という体裁をとっている。サッポーはもはや高名な詩人としての昔日の面影もなく、パオンに捨てられた今となってもなお彼への思いを断ち切れていない。しかし、夢の中に現れた水の精に、報われぬ愛から救われるためにレフカスから身を投げよ、とお告げをされて、やっとそうする決心をする。

18世紀のイギリスでは、オウィディウスのサッポーの話は、アレグザンダー・ポープ（Alexander Pope, 1688-1744）によって英訳された「パオンに宛てたサッポーの手紙」（“Sappho to Phaon,” 1712）を通して、かなり普及していた。しかし、サッポーの投身伝説が広く行き渡ったのは、ジョゼフ・アディソン（Joseph Addison, 1672-1719）の『スペクテーター』（*The Spectator*）誌の一連の学術的あるいは似非学術的記事によると思われる。18世紀にはほぼ完全な形で伝わっていたサッポーの詩は二編（現在のローブ古典文庫中の「断篇1」[Fragment 1]と「断篇31」[Fragment 31]）とも女性への愛を描いている。しかし、アディソンは1711年11月15日付けの『スペクテーター』誌第223号において、フランスの学者アンヌ・ルフェーヴル・ダシエ夫人（Anne Le Fèvre Dacier, 1654-1720）のサッポー異性愛詩人説に従い、サッポーはパオンを追いかけてシチリア島に行ったとき、彼の愛を取り戻すために「ヴィーナスへの讃歌」（“An Hymn to Venus”）（「断篇1」）を創作したと説明した。そして、それでもパオンの心を動かせなかったサッポーは彼への^{パッション}熱情を逃れるためだったら何でもやると決心し、次のようにレフカスから身投げをしたと記した。

アカルナニアにレフカスと呼ばれる崖があり、その頂上にアポロンを祭った小神殿があった。絶望した恋人たちはこの神殿でいつも密かに誓いをたて、

そのあと絶壁のいただきから海へと身を投げ、時には生還した。それ故、この場所は〈恋人たちの投身〉(Lovers-Leap)と呼ばれた。彼らを感じる恐怖か、こんな恐ろしい救済策へと向かわせた決意か、落下の時にしばしば受けた傷か、いずれにしても愛の傷つきやすい感情すべてを追い払い、彼らの心を変えた。この身投げをした者たちは二度とあの熱情に逆戻りすることがないと言われていた。サッポーはその救済法を試したが、その試みで亡くなった。(Joseph Addison 2: 366)²

アディソンの記事は、フランスの哲学者・批評家のピエール・ベール (Pierre Bayle, 1647-1706) の『歴史批評事典』(*Dictionnaire historique et critique*, 1697) を種本にしている (Joseph Addison 2: 365n3)。1710年に最初の英訳が出て以来何度も版を重ねたベールの事典は知の宝庫で、各項目の注には古代文献から同時代の文献まで出典を偏見なく網羅していた。「レフカス」の項の注 (Bayle 3: 1922n (B)) では、かつてアポロン神殿で毎年おこなわれた災いよけの祭りで一人の罪人が強制的にレフカスの崖から落とされたのだが、やがて一般人が「愛の痛みを終止符を打つために自発的に」飛び降りるようになったという。「そこから、この場所は恋人たちの投身 (*Lovers Leap*) と呼ばれた」のだ。ベールはまたサッポーが最初の投身者だったと唱えた古代ギリシャの地理学者ストラボン (Strabo, c. 64 B. C.-c. A. D. 23) の説を否定し、メナンドロスを見れば、その前にも投身者がいたことは明らかであるとした。

このように、アディソンもベールも、サッポーがパオンへの愛を消すためにレフカスから飛び降りた結果、亡くなったと記している。つまり、サッポーは、自殺するために身投げしたのではなく、身投げしたら死ぬかもしれない恐怖に襲われずに、生還することを信じながら身投げしたのである。

ベールによれば、こうした「飛ぶのは怖くない」サッポーは、ホラティウス (Horace, 65-8 B. C.) のいう「男性的なサッポー」(*Mascula Sappho*) に対する近代の注釈者たちによる三つの解釈のうちの一つだった。三つの解釈とは、(1) 彼女はトリバド (同性愛者) だった、(2) 彼女は紡錘や糸巻棒を扱うよりも学問への嗜好があった、(3) 彼女はレフカスから投身する勇気をもっていた (Bayle

3: 2671n (E)) である。(1) と (2) に関しては、古くは3世紀初期のローマのホラティウス注釈者ポルピュリオン (Porphyrio) によって論議の的にされた。(3) は比較的新しく、学者スカリジェル (Scaliger, 1540-1609) やチュルネーブ (Adrien Turnèbe, 1512-65) の説である (Bayle 3: 2671n (E))。

アディソンはダシエ夫人のサッポー異性愛詩人説に従っていたので、上記(1)の解釈については何ら触れていない。しかし、(3) の解釈については、『スペクテーター』誌第233号 (1711年11月27日) で、サッポーの投身をふたたび取り上げたときに、採用している。この号は、その一週間前に発行した第227号 (1711年11月20日) と同じく、「恋人たちの投身」(Lovers Leap) について読者の興味を引くことを目的としている。第227号では、読者からの手紙を二通紹介した。一通は内科医からのもので、海水もしくは塩水の薬としての絶大な効用を説きながら、「投身」は一般的に「愛」に限らず「他の不運すべて」に「効果的な救済法」であったという。もう一通は失恋した若い女性からのもので、「私たちの時代の女性は、ヴィーナスへの讃歌をうたっても苦痛が軽減されないように、そのように身を投じても苦痛が軽減されないだろう」(Joseph Addison 2: 384) と、投身の治療効果に懐疑的だった。

そこで、アディソンは、学識ある友人から送られてきたギリシャ語の小写本の翻訳を出版すると約束し、第233号においてそれを紹介する。その写本のタイトルは、『第46オリュンピア紀に、デルポイのアポロンの神殿で誓願を立てて、愛の熱情を癒すためにレウカスの崖からイオニア海に投身した男女の話』(*An Account of Persons Male and Female, who offered up their Vows in the Temple of the Pythian Apollo, in the Forty sixth Olympiad, and leaped from the Promontory of Leucate into the Ionian Sea, in order to cure themselves of the Passions of Love*) である。アディソンは、この写本はほとんどが無味乾燥な内容で、投身した人の名前と誰のために投身したのか、そして落下で癒されたか、死んだか、不具になったかを手短かに記しているだけなので、特に尋常でないものだけを選んで紹介したといい、神話的人物から実在の人物などについてまことしやかな話を続けたあと、最後から二番目に、サッポーの話をこう記した。これは、他の話に比べかなり長い。

パオーンに恋をしたレスボス島民のサッポーは、花嫁のように雪のように白い衣に身をつつんで、アポロン神殿に着いた。彼女は頭上に月桂樹の冠をかぶり、手には彼女が発明した小さな楽器を持っていた。アポロンに讃歌をうたったあと、彼女は彼の祭壇の片側に冠を、反対側に豎琴をおいた。それからスバルタの乙女のように自分の衣をたくし上げ、彼女の無事を氣遣って救助願をささげた何千もの見物人たちの間をぬって、崖の最先端へとまっすぐ歩みを進めた。そこで、われわれが聞くことはかなわぬが、自分自身の詩の一節を暗唱したあと、これまであの危険な投身を試みたどの人にも見られなかったような大胆さで、岩から身を投げた。居合わせた多くの人々は、彼女が海へ落ち、そこから二度と上がってこなかったのを見た時、語った。だが、彼女は海の底に着かず、落下しながら白鳥に変化し、その姿で空を舞っているのを見た時と断言する者たちもいた。しかし、彼女の衣の白さとそのはためきが彼女を見ている人々を欺いたのか、それとも彼女が本当にあの音楽と憂鬱の鳥に変容したのかどうか、レスボス島の人々は今なお疑問に思っている。(Joseph Addison 2: 408-09)

第223号のサッポーの記事でははっきりしていなかったが、ここでは、サッポーの投身は「これまであの危険な投身を試みたどの人にも見られなかったような大胆さで」と、誰よりも勇ましい飛び方であったこと、そして、それが「何千もの見物人たち」の前で行われたことが強調されている。つまり、サッポーの恐れをものともしない投身はいわば見世物的な光景であったのだが、それは投身が必ずしも死に直結するわけではないことを示している。アディソンがこの記事の最後に掲載した表によれば、このオリュンピア紀年に投身した人の総数は250名で、内訳は男性124名、女性126名、そして治癒者は120名で、内訳は男性51名、女子69名だった (Joseph Addison 2: 409)。男女ほぼ同数の者が投身し、生還率は女性の方が若干大きく、50%弱だった。賭けとしてやってみる価値はあったと言える。

II

アディソンの記事では、サッポーは似非学術的な写本の中のレフカスの投身者たちの一人にすぎなかった。だが、やがてレフカスの投身者はサッポー一人に集約されていくようになる。これは『スペクテーター』誌の記事において、「恋人たちの投身」^{ラヴ・リープ}の表記がこれまで引用してきた1711年版では“Lovers Leap”と“Lover”が複数形だったのが、やがて“Lovers Leap”と“Lover’s Leap”の両方が用いられ、18世紀後期にはほとんどの版で単数形が用いられるようになったことと軌を一にする。³またベールの1826年版でも、前に引用した箇所は“the Lover’s Leap” (3: 182) と、単数形である。

レフカスの投身者が複数からサッポー一人になる間に、彼女の投身についての捉え方も変わっていった。18世紀のサッポーの詩の英訳者たちは「断篇1」を異性愛の詩として訳し続けたが、訳詩に付記したサッポーの伝記の中では、ジョゼフ・アディソンと違って、彼女の同性愛や両性愛について隠すようなことはしていない。しかし、たとえば、1835年の『アナクレオンとサッポー著作集』(*The Works of Anacreon ... Sappho*)では、サッポーの詩の訳者ジョン・アディソン (John Addison) は、彼女の女性の恋人たちの名前を挙げたあとすぐに、「美しいパオーンほど彼女の賞賛の対象になった者はいなかったようだ」(John Addison 252) と、オウィディウスの詩に倣って、彼女の人生が最後には異性愛で終わったことを歓迎した。それから、サッポーの投身について、前に引用したジョゼフ・アディソンの記述をほとんど忠実に繰り返し、「サッポーはその救済法を試したが、その試みで亡くなった」(253) と結んだ。

一方、看過できないことに、ウィリアム・キング (William King, 1685-1763) は匿名で出版した『祝杯』(*The Toast*, 1732) の1736年版の注において、サッポーのセクシュアリティと投身についてジョゼフ・アディソンとは違う見解を示している。つまり、サッポーは「有名なトリバドだった」ので、プラトン (Plato, 427-347 B. C.) によって授けられた「第十番目の詩神」(“The Tenth Muse”) としての名声が汚されたと述べたあと、次のようにサッポーの投身が同性愛にふけた「懲罰」だったことを強調するとともに、それが「自殺」だったことを

明記したのである。

ギリシヤ人は好色で不道德であるけれども、それでもこれを非常に破廉恥な熱情と見なした。そしてサッポーの懲罰には正義の特別な法があったようで、彼女は最後に一人の男への愛のために自殺した。(King 110n)

これは、私の知る限り、サッポーの投身を愛の病の治療ではなく、自殺として認定した最初のテキストである。

18世紀半ばをすぎると、サッポーの詩の翻訳者たちも、サッポーの投身を自殺と記述するようになった。ただし、キングのようにサッポーの投身自殺を同性愛の罰として捉えてはいない。むしろ同性愛者としてのサッポーを抑圧する傾向が以前よりも強まり、異性愛者サッポーの「男性的」な面を称えた。その代表がE・B・グリーン (E. B. Greene, c. 1730-88) である。彼は1768年にサッポーの二編の詩とも異性愛の詩として(誤)訳し、伝記でもホラティウスの「男性的なサッポー」についての解釈を紹介するときに、ポルピュリオンによる二つの解釈 (Campbell 19; *test.* 17) のうちのひとつ(彼女の詩が男性の詩に匹敵するように優れていること)を紹介するにとどまり、もう一つの解釈である同性愛について全く触れていない。そして、ダシエ夫人による解釈として、サッポーが “the extravagant *Lover's Leap*” (Greene 136n) (“*Lover's*” と単数形で綴られていることに注意したい) をしたことをあげている。別の箇所では、サッポーの投身をパオーンに対する熱情を消すための「自殺」として明記しただけではなく、「高名なサッポーは首つりや川への入水のような安らかな自殺とは合わないので、レフカスの絶壁のてっぺんにのぼり、その地に建てられたアポロン神殿で最期の誓願をしたあと(中略)、そこから海へ身を投げた」(133-34)と、眼下に海を見下ろす断崖絶壁からの男性的な投身を称え、首つりや川に身投げして安らかに死を迎える普通の女性たちと一線を画した。

III

18世紀末期には、サッポーの投身自殺が詩や小説などの文学や絵画のテーマとして頻繁に取り上げられるようになる。サッポーの自殺への関心の高まりの背景には、おそらく1770年に17歳のトマス・チャタトン(Thomas Chatterton, 1752-70)が服毒自殺した事件と、ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832)の人気小説『若きウェルテルの悩み』(*Die Leiden des Jungen Werthers*, 1774)(最初の英訳は1779年)の影響があるだろう。

18世紀イギリスの自殺観を振り返ってみると、自殺は“self-murder”として法律上の犯罪(crime)であり、教会では神のおきてにそむく罪(sin)だった。しかしながら、マイケル・マクドナルド(Michael MacDonald)によれば、実際に検死陪審員たちによって自殺と認定されて、教会墓地ではなく十字路に木の杭を突き刺されて埋葬され、全財産が没収されるという罰を受ける人の数は急減していた。それは、自殺者に対する態度が厳罰的なものから寛容や同情へと大きく変わったことを反映している。つまり、自殺に関する法そのものは19世紀まで変わらなかったのだが(十字路での埋葬の中止は1823年、財産没収がなくなったのは1870年である)、検死陪審員たちは没収するだけの財産を所有していない貧乏人や女性たちの自殺を見逃したり、数が多かった溺死のように事故か自殺か判断に迷うような場合、自殺の判定を避けたりした。それ故、法的に責任能力のない狂人の自殺として判定するケースが増加し、18世紀後半にはほとんどすべての自殺がそうだった(MacDonald 58-76)。マクドナルドはこうした現象を「自殺の世俗化」と呼んでいる。つまり、自殺の原因を悪魔の仕業として見なすのではなく、医学的な説明に求めるようになったのである。18世紀には、自殺は「イングランドの病」(Bartel 145-48; Todd 109)としてたびたび言及されたが、これは不法行為とは認定されない精神障害による自殺がいかに多かったかを端的に表現していると言えよう。

しかし、ドンナ・T・アンドリュー(Donna T. Andrew)が指摘するように、自殺に関する当時の言説はもっと複雑で一様ではなかった(Andrew 161)。ハーバート・クロフト(Herbert Croft, 1751-1816)は実際の殺人事件に基づく小説『愛

と狂気』(*Love and Madness*, 1780)の中で、「どの自殺者も狂人である」(Croft 262)と強調した上で、チャタトンの自殺を彼の溢れる想像力と感受性の故であるとし、のちのロマン派詩人たちによるチャタトン賛辞の口火をつけた。さらに、ゲーテの小説の1786年の英訳版『ウエルテルとシャルロット』(*Werter and Charlotte*)の訳者は、その序において、ウエルテルの「感情はわれらがチャタトンの感情と同じように、積み重なる苦悩の重荷を支えるには余りにも繊細だった」(Goethe iii)と、両者の自殺の類似を指摘し、ともに繊細な感受性に起因するものとして自殺を美化した。一方、英国国教会牧師のジョージ・グレゴリー (George Gregory, 1754-1808) は『歴史・道徳論』(*Essays Historical and Moral*, 1785)で、「自殺が理性に反したもので、軽卒と激情か、せいぜい誤り導かれた想像力の命じるところのものだけならば、私は躊躇せずにそれが罪深いと断言する」(Gregory 292)と、自殺擁護の風潮を批判しつつ、ローマの政治家の小カトー (Cato Minor, 95-46 B. C.) やブルトゥス (Marcus Junius Brutus, 85-42 B. C.)、インドで活躍したイギリスの軍人・政治家のロバート・クライブ (Robert Clive, 1725-74) の自殺は「臆病」(292)が原因ではないとして例外視した。また、英国国教会牧師のチャールズ・ムーア (Charles Moore, 1743-1811) は、『自殺に関する総合研究』(*A Full Enquiry into the Subject of Suicide*, 1790)において、ウエルテルのように「制御できない熱情の衝動によって理性を奪われた」ことによる「自発的な」(voluntary)自殺と早熟の天才のチャタトンのように「無念と失望、赤貧とぼろい服、寒さと飢えのような現実の困窮の本当に込み入った重荷」のせいによる「不本意な」(involuntary)自殺を峻別し、前者のケースは同情の対象にならないと批判した(Moore 2: 141-42)。ムーアによれば、批判すべき「自発的な」自殺の原因にはジェンダー差があった。つまり、男性が「社会にとって自分が取るに足らないという思い」で「苛立たしさや失望」にかられ、衝動的に自殺するに対し、女性は「愛への失望や嫉妬で、恥辱と不義からの確実な避難所として自殺に逃げ、そして彼女の死の罪を誓いを破った男性に負わせる」(Moore 1: 5)。このジェンダー差に従えば、愛のために自殺したウエルテルは女性的だったと言える。

ちなみに、ジャネット・トッド (Janet Todd) は、18世紀には自殺の方法に

もジェンダー差があり、女性は溺死と服毒であり、男性はピストルと首つりだったと述べている (Todd 112)。しかしながら、当時のイギリスの検死データによれば、溺死は女性の自殺の最も好まれた方法だったが、男性でも首つりに次いで二番目に多い方法だったので (MacDonald 66)、ジェンダー差があるというよりもむしろ全体として一番ありふれた方法だったことは確かである。1774年に設立されたイギリス初の人命救助団体「人道協会」(Humane Society)⁴がまず身投げして溺れた人を救助し蘇生させる活動を行ったのは、そのためであろう。協会が別の方法の自殺未遂者も救助するようになったのは1798年からである (Bartel 152)。

文学作品の中でも、自殺の方法にはジェンダー差はないが、自殺の原因には女性の場合ほとんどすべて愛が絡んでいる。たとえば、ウェルテルはピストル自殺をするが、トマス・グレイ (Thomas Gray, 1716-71) の『吟遊詩人』(*The Bard*, 1778) の主人公は、ウェールズのすべての詩人の死を命じたノルマン王エドワード一世 (Edward I) に対する抗議として、ウェールズ最高峰のスノードンから川へと身投げする。一方、ニコラス・ロウ (Nicholas Rowe, 1674-1718) の『美しき悔悟者』(*The Fair Penitent*, 1703) の不義をはたらいたカリスタ (Calista) は短剣を使って自殺し、フランセス・バーニー (Frances Burney, 1752-1840) の『放浪者』(*The Wanderer*, 1814) のエリナー (Elinor) の失恋による自殺未遂は最初が短剣で、あとの二回はピストルを使用する。

グレイの最後の吟遊詩人の投身は明らかに男性的で英雄的な行為である。これに対し、18世紀末期のサッポーの投身自殺は、ウェルテルの報われない愛だけではなく、チャタトンの天才の苦悩という、ジェンダー的にそれぞれ女性と男性の範疇に属する二つの動機に関係している。しかし、愛に起因する自殺に対して「繊細な感受性」の賞賛と「制御できない熱情」の批判という、相反する反応があった時代においては、その表象は当然のことながら様々な様相を呈した。

まず、フランスの聖職者ジャン＝ジャック・バルテルミ (Jean-Jacques Barthélmy, 1716-95) のようにサッポーを偉大な詩人として再評価しようとする者は、彼女の豊かな感受性を称えている。バルテルミは1788年に出版し、

1791-92年に英訳された小説『小アナカルシスのギリシャ旅行記』(*Travels of Anacharsis the Younger in Greece*)で、情熱的な言葉をつむぐ詩人サッポーを称賛するとともに、サッポーとレスボスの女性たちを文学教師と弟子の関係であるとすることによって、サッポーの同性愛を否定した。そして、サッポーはその度を越えた感受性故にパオーンを愛したけれども、彼に捨てられ、「今後彼がいてもいなくとも幸福になる望みがないので、レフカスから飛び降りて、波間に消えた」(Barthélmy 2: 64)と、簡単に記した。このようにバルテルミはサッポーの投身をパオーンへの愛を忘れるためというよりは彼と決別するための自殺として見なした。

バルテルミに影響を受けたメアリ・ロビンソン (Mary Robinson, 1757-1800) もソネット連歌集『サッポーとパオーン』(*Sappho and Phaon*, 1796)において、詩人サッポーを再評価しようとする。⁵ロビンソンは、パオーンへの愛に苦しむ女性の「私」と偉大な詩人としての「サッポー」を区別しながら、「私」が詩人としてのアイデンティティを喪失していることを示すために「サッポー」の死を何度も描く。ロビンソンにとって、詩人「サッポー」の死は同時代のイギリス女性作家たちの抑圧された状況の象徴だった。それゆえ、「私」が女性の部分を捨て、詩人「サッポー」として復活することは、女性作家たちが正当に評価されて文学界に名を轟かせることを意味した。「私」は、ソネット41でレフカスから飛び降りる決心をしたあと、ソネット42「パオーンへの最期の訴え」(“Her last Appeal to Phaon”)において、その肉体は朽ちても、「サッポー」の名前(すなわち偉大な詩人としての名声)は永久に生き続けるであろうと力強く宣言する。従って、「私」は、伝説のように投身を愛の苦しみからの避難所として見なすことはしない。ソネット43「非業の死を遂げる前、レフカスの岩上における彼女の黙想」(“Her Reflections on the Leucadian Rock before she perishes”)で示されるように、「愛の恐ろしい支配」、すなわち男性への愛と男性からの愛に縛られている状態を軽蔑し、「愛」よりももっと「高尚な情念」や「もっと高尚なテーマ」をうたう詩人「サッポー」として蘇生するために、積極的に死の投身を歓迎するのだ。

ウィリアム・メイソン (William Mason, 1725-97) の劇詩『サッポー』(*Sappho*:

A Lyrical Drama in Three Acts, 1797) におけるサッポーは、ロビンソンのサッポーよりも早く、パオーンの支配を逃れている。⁶パオーンが自殺の意志を固めたサッポーに翻意を促そうと女々しく追いつがってくるのを、彼女は決然とはねのける。そして、レスボスから一緒に来たお供の乙女たちに向かって、「私の運命から、／不実な男を憎むことがないとしても、そんな男を信用しないことを学びなさい」(Mason 3.7) と言い遣して、身投げする。すると、『スペクテーター』誌の記事の中の一つの証言のように、サッポーは「白鳥」に姿を変えて、「天上での神聖な住まいと／地上での不朽の名声を獲得するために」、「ジュピターのもとへと高く」(3.7) 昇る。終幕場面におけるこのようなサッポーの神格化は、プラトンが彼女の人並み外れた詩才を称賛するとき、「第十番目の詩神」という呼称を用いていたことを想起させるだろう。男性への愛を断ち切ったサッポーは最後に白鳥（すなわち、偉大な詩人）になり、「不朽の名声」を獲得するのである。

ロビンソンやメイソンの詩ではサッポーの投身は偉大な詩人の名声を回復するためだった。一方、ロバート・サウジー (Robert Southey, 1774-1843) の詩「サッポー」(“Sappho,” 1797) では、パオーンにサッポーの死を後悔させて、後追い自殺させるために身投げすることになる。サウジーのサッポーは、人間の思い上がりや憤りを罰する女神ネメシス (Nemesis) にパオーンの悪夢に出没するよう祈りを捧げ、「汝の怒りから隠れるために／彼もまた底なしの海の下を求めてもらいましょう」(43-44行) と切に願う。そして、身を投げる直前になっても、「パオーンは冷淡だ、それなのにどうしてサッポーが生きられようか？／パオーンは冷淡だ、いや誰かもっと綺麗な人と一緒にいる—／そんな考えは死ぬよりもつらい！」(64-66行) と嘆く。このようにサウジーのサッポーは偉大な詩人というよりも最期までパオーンに未練たっぷりの女性で、彼に見せつけるために自殺する。彼女はまさにムーアが述べたような「彼女の死の罪を誓いを破った男性に負わせる」(Moore 1: 5) 女性の典型である。

ロビンソンのサッポーはレフカスから投身することの恐怖について全く触れていないが、サウジーとメイソンのサッポーはそれぞれ恐怖に襲われながらも、それに打ち勝ち身投げする。これに対し、少し時代が遡るが、イタリアの作家

アレッサンドロ・ヴェッリ (Alessandro Verri, 1741-1816) の1782年の小説で、1789年に伊英対訳版が出た『ミティリニの女性詩人サッポーの冒険』(*The Adventures of Sappho, Poetess of Mitylene*) の最終章「レフカスからの投身」(“The Leap of Leucate”) では、サッポーは恐怖のあまり自分から飛び降りることができない臆病な女性である。彼女は自殺を決意してレフカスにやってきたのに、眼下の「恐ろしい奈落」(Verri 2: 321)を見たとき、無意識に立ち止まった。ヴェッリはこれを「女性生来の臆病」(2: 323)と記している。サッポーはなんとか恐怖に打ち勝とうとするが、なかなか身投げできない。しかし、ついにしびれをきかせた愛と美の女神のヴィーナスによって胸をピンでさされ、海に背を向けたまま、落下してしまう。つまり、ヴェッリのあまりにも女性的なサッポーは、愛のせいで自殺するのではなく、愛によって殺されたのである。

アイルランド生まれのヘンリ・トレシャム (Henry Tresham, c. 1751-1814) がヴェッリ的小説への挿絵として描いた12枚のアクアチント版画のうちの最後「レフカスからの投身」(“Il Salto di Leucate,” 1784)は、ヴィーナスがサッポーの胸をヘアピンで刺したエピソードを描いている。絵の中のサッポーは海から顔をそむけ、頭を衣でつつみ、目を閉じた絶望のポーズで、崖から下に落ちる最中である。一人の愛の神キューピッド(Cupid)はサッポーのように頭を抱え、もう一人のキューピッドは目を閉じ、たいまつを下に向ける。イコノロジー的には、下向きのたいまつはサッポーの命と恋の炎が今にも消えることを示している (Stein 161)。

フランスのエティエンヌ・フランソワ・ド・ランティエ (Étienne François de Lantier, 1734-1826) の1797年に出版され、1799年に最初の英訳が出た小説『アンテーノールのギリシャ・アジア旅行記』(*The Travels of Antenor in Greece and Asia*)におけるサッポーも、ヴェッリのサッポーと同じように飛び降りるのを怖がる。小説の第30章「サッポーはレフカスから身投げする」(“Sappho takes the Leucadian leap”) で、アンテーノールの一行はレフカスを訪れたとき、サッポーの身投げを見物しに行く。『スペクテーター』誌におけるサッポーの見物的光景のように、崖の上にはすでに多くの見物人が集まっている。彼らの前で、サッポーは三度恐怖でためらう。しかし彼女の成功のお告げをしていたア

ポロン神殿の神官に促されて、四度目にやっと手と目を天に向けながら身を投げる。このようにランティエのサッポーの投身は18世紀初期の描写と同じく自殺ではない。しかし、ここではその点よりもむしろ、サッポーの投身を見ていた見物人たちが彼女の恐怖に共感して（“sympathetic horror,” 1: 262）、恐怖の叫び声を挙げたことが強調される。サッポーの身投げは恐怖をかき立てる崇高の光景なのである。

こうした崇高の光景は、絵画でも描かれている。たとえば、イギリス在住のイタリア人画家チプリアーニ（Giovanni Battista Cipriani, 1727-85）が描き、バルトロツィ（Francesco Bartolozzi, c. 1727-c. 1815）が彫版した絵「岩から身を投げるサッポー」（“Sappho Throwing Herself from the Rock,” 1782）⁷では、月光に照らされたサッポーは片足が岩から離れ、今まさに墜落しようとする瞬間である。アディソンの恋人たちの投身の描写やヴェッリの小説と違い、この絵は日中ではなく、夜中であり、また見物人もおそらくサッポーのお供と思われる女性一人だけである。彼女は恐怖の表情を浮かべながら、祈っている。夜の月光の舞台設定や恐怖はゴシック的な崇高の光景である。

IV

19世紀に入ると、サッポーへの関心はその投身の瞬間から投身前の時へと移るようになった。1820年代から30年代に活躍した女性詩人たち、レティシア・エリザベス・ランドン（Letitia Elizabeth Landon, 1802-38）とフェリシア・ヘマンズ（Felicity Hemans, 1793-35）は、死ぬ前に最期の歌をうたうサッポーを描いている。それは、オウィディウス的なサッポーというよりもフランスのスタール夫人（Madame de Staël, 1766-1817）の人気小説『コリンヌあるいはイタリア』（*Corinne ou l'Italie*, 1805）における女性即興詩人コリンヌ（Corinne）的なサッポーである。このサッポーは、ジャン・オーギュスト・ドミニク・アングル（Jean-Auguste-Dominique Ingres, 1780-1867）の絵「サッポーもしくはコリンナ」（“Sappho or Corinna,” 1809）のように、岩の上に座り、リラを奏でつつ歌をうたう。

ランドンは『リテラリ・ガゼット』(*The Literary Gazette*) 第276号(1822年5月4日)に発表した詩「サッポー」("Sappho")で、コリヌ的なサッポー像(詩の冒頭で、彼女は「何千もの群衆」を前にして即興詩をうたい、大喝采を浴びる)に自伝的要素をからませている。ランドンは彼女を詩壇にデビューさせてくれた『リテラリ・ガゼット』編集者のウィリアム・ジャーダン(William Jerdan, 1782-1869)とひそかに不倫関係にあった(Lawford 36)。詩の中では、ジャーダンを若い頃のサッポーに詩と愛を教えた人物として登場させ、彼女がのちにパオーンに惹かれたのはその年上の最初の恋人にとってもよく似ていたからだとする。このサッポーは「才能、富、名声」(71行)があっても愛の苦しみを癒せないことを知っていた。そして、詩は彼女の身投げの瞬間を描くことなく終わる。最後の5行では、それはすでに過去の話である。現在、彼女は海に眠っているが、その名前は死の直前に「最期の歌」をうたった詩人として後世に残るだろうと称えられる。

1824年出版の長編詩『女性即興詩人』(*The Improvisatrice*)の作中歌である「サッポーの歌」("Sappho's Song")では、ランドンのサッポーは第4連で「私に歌を教えてくれたのは愛だった」のに、今や愛を失くしたのでうたえないと嘆く。しかし、「私はあなたの名前を挙げない!」と、自分の恋人の名前を明かさなないことによって、愛のために死ぬサッポーの運命は女性詩人全般にとって普遍的な運命であることを示唆する。

ヘマンズも同様に、『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』(*Blackwood's Edinburgh Magazine*) 第29号(1831年1月)に発表した「サッポーの最期の歌」("The Last Song of Sappho")で、女性詩人全般にとって名声は愛の喪失の埋め合わせにならないことを示そうとする。1834年出版の詩集に再掲されたこの詩のエピグラフによると、ヘマンズはリチャード・ウエストマコット(Richard Westmacott, 1799-1872)の美しいスケッチに靈感を受けた(Hemans 466n2)。ウエストマコットのスケッチは残存していないが、そこで描かれたサッポーは海を見おろす岩の上に腰を下ろし、リラを足下に投げ捨てていたらしい。サッポーの絵画的表象では、リラは彼女が詩人であることを示す小道具なので、それが捨てられていたということは、彼女が詩的な声を喪失していることを示す。

ヘマンズの詩の中のサッポーは、第5連で、愛のせいで「死の風が／私の豊かな音色のリラを襲い、その生き生きとした弦を黙らせたのか」と、問う。愛は詩人の殺人者なのだ。第7連では、彼女はそれでも「名声」や「月桂冠」を保持しているが、寂しい心はそれらをこれから飛び込む海のものにしようとする。そして第8連では、「私の苦惱、私の名声を埋葬してください」と、これから飛び込む海に向かって叫ぶ。

このように、ランドンとヘマンズのサッポーは18世紀末のロビンソンのサッポーと違って、偉大な詩人として蘇生するために果敢に身投げするようなことはしない。身投げの恐怖やその瞬間も描かれていない。彼女たちのサッポーはきわめて女性的である。しかし、愛の喪失と詩的言葉の喪失をメランコリックにうたうことで逆説的に詩人になることができるのである。

以上のように、サッポーの投身は、愛の治療から自殺に意味が移ったあと、ロマン主義時代には、高名な詩人として蘇生するための自殺、愛による殺人、恐怖をかき立てる崇高の光景から、最後には身投げそのものに対する無関心へと変わっていった。こうしたサッポーの投身への関心の移り変わりは、飛ぶのが怖くない男性的なサッポー像から飛ぶのが怖い女性的なサッポー像への変化とともに、同時代の女性詩人像の変化や愛と死とジェンダーの考えを如実に反映しているのである。

*本論は、名古屋大学英文学会第52回大会（2013年4月20日）における講演に基づき、修正を施したものである。なお、本論はJSPS科研費24520324の助成を受けている。

注

- ¹ Leucate, Levkas, Leucadiaなどの表記もある。本論では、いずれも訳語として「レフカス」を用いる。
- ² 本論では、以下同様に、原文でイタリック体の箇所を傍点で示す。
- ³ *Eighteenth Century Collections Online*所収のすべての版の『スペクテーター』の調査

結果に基づく。詳しくはKawatsu 189n12を参照。

⁴ 人道協会の設立趣旨や活動内容に関して、詳しくは松永 114-56を参照。

⁵ ロビンソンのサッポーについて、詳しくは川津『サッポーたちの十八世紀』第9章を参照。

⁶ メイソンのサッポーについて、詳しくは川津「男装のサッポーとセクシュアリティ」を参照。

⁷ この彫版画は、ウィリアム・ベックフォード (William Beckford) のイタリア紀行記『夢、歩きまわる考え、そして出来事』 (*Dreams, Waking Thoughts, and Incidents*, 1783) の扉を飾った。

引用文献

- Addison, [John]. "The Life of Sappho." *The Works of Anacreon.... To Which are Added the Odes, Fragments, and Epigrams of Sappho*. London: John Watts, 1735. 249-55.
- Addison, Joseph. *The Spectator*. Ed. Donald F. Bond. 5 vols. Oxford: Oxford UP, 1965.
- Andrew, Donna T. "Debate: The Secularization of Suicide in England 1660-1800." *Past & Present* 119 (May 1988): 158-65.
- Bartel, Roland. "Suicide in Eighteenth-Century England: The Myth of a Reputation." *Huntington Library Quarterly* 23 (1960): 145-58.
- Barthélmy, [Jean-Jacques], Abbé. *Travels of Anacharsis the Younger in Greece: During the Middle of the Fourth Century Before the Christian Aera*. [Trans. William Beaumont.] 7 vols. London: G. G. J. & J. Robinson, 1790-91.
- Bayle, Pierre. *An Historical and Critical Dictionary*. 4 vols. London: C. Harper, etc., 1710.
- . *An Historical and Critical Dictionary, Selected and Abridged from the Great Work of Peter Bayle*. 4 vols. London: printed for Hunt and Clarke, 1826.
- [Beckford, W.] *Dreams, Waking Thoughts, and Incidents; in a Series of Letters, from Various Parts of Europe*. London: J. Johnson, 1783.
- Burney, Frances. *The Wanderer; Or, Female Difficulties*. Ed. Margaret Anne Doody, Robert L. Mack, and Peter Sabor. Oxford: Oxford UP, 1991.
- Campbell, David A., ed. and trans. *Greek Lyric I: Sappho and Alcaeus*. Loeb Classical Library 142. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1982.
- Goethe, Johann Wolfgang von. *Werter and Charlotte, a German Story*. London: printed for the

- translator, 1786.
- Gray, Thomas. *Selected Poems*. Ed. Ian Hamilton. London: Bloomsbury, 1997.
- [Greene, Edward Burnaby.] "Observations on the Life, and Writings of Sappho." *The Works of Anacreon and Sappho*. [Ed. and Trans. Greene.] London: J. Ridley, 1768. 129–38.
- Gregory, George. *Essays Historical and Moral*. London: J. Johnson, 1785.
- Hemans, Felicia. *Felicia Hemans: Selected Poems, Letters, Reception, Materials*. Ed. Susan J. Wolfson. Princeton and Oxford: Princeton UP, 2001.
- Jong, Erica. *Fear of Flying*. 1973. London: Vintage, 1998. 『飛ぶのが怖い』柳瀬尚紀訳. 新潮文庫, 1976.
- . *Sappho's Leap*. New York and London: Norton, 2003.
- Kawatsu, Masae. "The Poet and the Lover: Byron's Sappho." 『揺るぎなき信念—イギリス・ロマン主義論集』. 新見聖子・鈴木雅之編. 彩流社, 2012. 173–94.
- [King, William.] *The Toast: An Heroick Poem in Four Books*. Dublin; rpt. London, 1736.
- Landon, Letitia Elizabeth. *Poems from The Literary Gazette*. Ed. F. J. Sypher. Ann Arbor: Scholars' Facsimiles & Reprints, 2003.
- . *The Improvisatrice; and Other Poems*. 1825. 5th ed. Poole and New York: Woodstock, 1996.
- Lantier, Étienne-François de. *The Travels of Antenor in Greece and Asia*. 3 vols. London: T. N. Longman and O. Rees, 1799.
- Lawford, Cynthia. "Diary." *London Review of Books* (21 Sept. 2000): 36–37.
- MacDonald, Michael. "The Secularization of Suicide in England 1660–1800." *Past & Present* 111 (May 1986): 50–100.
- Mason, William. *Sappho: A Lyrical Drama in Three Acts. Poems by William Mason, M. A.* Vol. 3. York: W. Blanchard, 1797. 147–89.
- Moore, Charles. *A Full Enquiry into the Subject of Suicide*. 2 vols. London: J. F. and C. Rivington, 1790.
- Ovid. *Heroides and Amores*. Trans. Grant Showerman. Loeb Classical Library 41. 2nd ed. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1977.
- Robinson, Mary. *Sappho and Phaon, In a Series of Legitimate Sonnets*. 1796. Delmar, New York: Scholars' Facsimiles & Reprints, 1995.
- Rowe, N. E., Esq. *The Fair Penitent*. 1703. *Five Restoration Tragedies*. Ed. Bonamy Dobree. London: Oxford UP, 1928.

- Southey, Robert. *Poetical Works 1793-1810*. Gen. ed. Lynda Pratt. Vol. 5. London: Pickering, 2004.
- Staël, Madame de. *Corinne, or Italy*. Trans. Isabel Hill. With metrical versions of the odes by L. E. Landon. New York, 1876. Kessinger Legacy Reprints.
- Stein, Judith Ellen. *The Iconography of Sappho, 1775-1875*. Diss. U of Pennsylvania, 1981. Ann Arbor: UMI, 1981. 8117858.
- Todd, Janet. *Gender, Art and Death*. Cambridge: Polity, 1993.
- Verri, Alessandro. *Le Avventure di Saffo, Poetessa di Mitilene/The Adventures of Sappho, Poetess of Mitylene*. 2 vols. London: T. Cadell, 1789.
- 川津雅江『サッポータちの十八世紀—近代イギリスにおける女性・ジェンダー・セクシュアリティ』。音羽書房鶴見書店, 2012.
- .「男装のサッポとセクシュアリティ」。『十八世紀イギリス文学研究—第四号交渉する文化と言語』日本ジョンソン協会編, 開拓社, 2010. 294-314.
- 松永幸子『近世イギリスの自殺論争—自己・生命・モラルをめぐるディスコースと人道協会』。知泉書館, 2012.

Synopsis

Fearless of Leaping: Sappho's Love, Suicide, and Gender
Masae Kawatsu

The legendary leap of Sappho, the ancient Greek woman poet, has inspired various fictional accounts from ancient times to the present. This essay examines how the interpretation of Sappho's leap underwent changes in regard to love, suicide, and gender during the long eighteenth century.

The story of Sappho taking a fatal leap from the rocks of Leucas into the sea for love of Phaon, a handsome boatman, had come down from Menander's comedy through Ovid's epistle "Sappho to Phaon" to modern times. Pope's translation of Ovid's poetry in 1712 contributed to making the image of Ovidian Sappho widely known. But it was Joseph Addison's academic or pseudo-academic articles in the *Spectator*, Nos. 223, 227, and 233 in 1711 that popularized Sappho's leap throughout Britain. Addison uses the French philosopher Pierre Bayle as his authority for saying that the place of Leucas was called "Lovers-Leap" since despairing lovers leaped from there for "the Cure" to stop the pains of lost love, and that Sappho was one of the leapers. Addison as well as Bayle also remarks that Sappho did not commit suicide but took a dangerous leap fearlessly in expectation of survival. According to one of the modern interpretations on Horace's *Mascula Sappho*, Bayle notes, she had such "Courage" that she was called "masculine." Two other interpretations were that "she was a Tribas [homosexual]" and that she had an inclination "for the Sciences, instead of handling the Spindle and Distaff."

As time went by, Sappho gradually came to be the only leaper at Leucas. This was reflected in the change of spelling of the place of her death in *the Spectator*: "Lovers-Leap" in the 1711 edition, "Lovers Leap" or "Lover's Leap" in mid-eighteenth-century editions, and "Lover's Leap" in most of the late century editions. In the meantime, ideas about Sappho's leap had changed. Whereas John Addison, an English translator of Sappho's poetry

in 1835, followed the view of Joseph Addison that Sappho was heterosexual and leaped to cure her heartbreak, William King added notes to his 1736 edition of *The Toast* that Sappho was “a famous Tribade,” which tarnished her reputation as the “Tenth Muse,” and that as a punishment for her homosexuality, she “killed herself at last for the Love of a Man.” As far as I know, King’s text was the earliest that presumed Sappho’s leap to be for the sake of suicide.

In late eighteenth century, English translators of Sappho also depicted her leap as suicide. But unlike King, they admired the heterosexual Sappho’s “masculine” ability in composing poetry and her “masculine” suicide leap. In 1768, for instance, E. B. Greene distinguished clearly between other lovesick women who “peaceably” dispatched themselves “by the noose, or the river” (133) and the masculine Sappho who killed herself by leaping from a much higher precipice into the sea.

In the 1780s and 1790s, Sappho’s suicide leap became a popular subject for literary works and paintings. This was probably influenced by the case of Thomas Chatterton’s killing himself in 1770 and Goethe’s popular novel *The Sorrows of Young Werther* (1774; first English trans. 1779). Although the attitude to suicide changed greatly from severe punishment to compassion in the eighteenth century, the debate on suicide was not monolithic. The translator of Goethe’s novel (*Werter and Charlotte*, 1786), for instance, admired the similar sensibility of Chatterton and Werther: their feelings were “too fine to support the load of accumulated distress.” On the other hand, Charles Moore in *A Full Enquiry into the Subject of Suicide* (1790) criticized Werther’s “voluntarily” suicide for “an uncontrolled passion,” to distinguish it from Chatterton’s “involuntarily” suicide for pecuniary difficulties. Sappho’s suicide leap was in relation to two aspects of affliction of an unrequited lover and a poetic genius. But at the time when there were contrary reactions to suicide for love (admiration for “too fine” a sensibility and accusation against “an uncontrolled passion”), it is little wonder that Sappho’s leap took on various visages. The French Abbé Barthélemy in

Travels of Anacharsis (1788; first English trans. 1791–92) reestimated Sappho as a great poet of sensibility, and presented her leap as a suicide for breaking away from cold Phaon on her own initiative. Drawing on Barthélmy, Mary Robinson went further in *Sappho and Phaon* (1796) to proclaim Sappho as the representative of all women poets in later ages. Robinson's Sappho repeatedly laments the death of "Sappho" (=her poetic self) while "I" (=her woman self) is held captive by love to Phaon, so that she decides to kill her woman self by bravely leaping at Leucas in order to be revived as the great "Sappho" in the future. Unlike Robinson, Robert Southey in "Sappho" (1797) portrays Sappho as still being attached to Phaon just before leaping. Southey's Sappho dies only to make Phaon regret what he has done, and to urge him to kill himself to join her in death. On the other hand, the Italian Alessandro Verri in *The Adventures of Sappho* (1782; first English trans. 1789) depicts a Sappho who is fearful of leaping because of "the timidity natural to the sex." Verri's Sappho is consequently killed and thrown down by Venus. The French Étienne François de Lantier in *The Travels of Antenor in Greece and Asia* (1797; first English trans. 1799) also presents the fearful-leaping Sappho, and turns her leaping moment into a sublime sight that the viewers regard "with sympathetic horror." Such a horrid, sublime scene was also the subject of paintings such as Cipriani's "Sappho Throwing Herself from the Rock"(1782).

As we moved into the nineteenth century, Sappho's leap moment became less popular. Women poets of the 1820s and 1830s, such as Letitia Elizabeth Landon and Felicia Hemans, were more interested in Sappho's last song sung just before her fatal leap. Their Sappho is like Corinne, the heroine of the novel by Madame de Staël, who sang her last song before death. That Sappho lamentably sings that even though she has "talents, riches, fame" (Landon, "Sappho," line 71) she cannot compensate for the loss of love. Landon and Hemans thus created a womanly and melancholic poet Sappho.